2006年度　私立大学図書館協会東地区部会　館長会　会議録

1．日　時：2006年6月9日（金）12：00～13：35
2．会　場：鶴見大学　鶴見大学会館3階第２会議室
3．テーマ：「図書予算の在り方」
4．議　事
（1）司会者紹介
東地区部会長校の松村駒澤大学図書館長から本日の議長高田信敬鶴見大学図書館長を紹介された。

（２）「図書予算の在り方について」の話題提供
高田鶴見大学図書館長から、議長というより話題提供として進める旨の自己紹介があった。

（外部委託と共通経費化）
本日の話題は、「図書予算の在り方について」であるが、図書予算を含む図書館全体の経費がどの大学でも削減傾向にあるので、少しこの点についてふれておく。削減圧力への対応として、ひとつには外部委託がある。確かに一応の節約効果は認められるが、技術の内部蓄積・人的継承性・組織力等の面からはマイナスも決して少なくないので、一時の「はやりもの」に乗せられて良いかどうか、なお慎重を要するのではないか。もうひとつ、図書館予算の共通経費化がある。「学術情報基盤の今後の在り方について」（文部科学省報告資料「科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会、学術情報基盤作業部会報告」）の勧める、学部縦割り型から大学全体の共通経費化の方向である。予算執行の効率化が期待され、増額が望めない場合でも有効に使え、削減回避も可能かも知れない。実際、学部間で横断的に使う電子情報（雑誌）の経費捻出には適切である。しかしこれも教員個々の意見をどう反映させるかの点で、問題が予想される。
（状況の悪化）
現在私学図書館は、予算不足・スペース不足・人材不足の、足りないもの尽くしである。余計にあるのは負担ばかり。特に人材不足は、単に人手が足りないのではなく、高度化する教育研究を支援できる職員がいるか、多様化する利用者のニーズに答えられるかが問題であり、予算不足と共に深刻な状況であると言えるであろう。
（限りある予算の活用）
予算不足に対しては、外部資金（補助金・寄付金）の導入がまず考えられる。しかし強力な支援組織のない大学では、恒常的に期待出来ない。しかもメディアの多様化が劇的に進行し、原本的な第一次資料から従来の紙媒体の資料（書籍）、ＤＶＤ・ＣＤ、電子ジャーナル等に至るまで、幅広い対応を迫られている。新しいメディアに関する要求がある以上図書館としては対応せざるをえないが、うっかりするとそれらは再生装置更新にともない、廃棄物と化してしまう。巨額の経費をつぎ込んで山のように消耗品的情報を買い込むやり方と言えるが、新しい情報に価値のほとんどを置く理科系の学問分野では、あらゆる資料を消耗品として捉え、大量購入・大量廃棄に徹してゆくのも一つの見識であろう。しかし人文科学系・社会科学系に比重がかかる図書館では、すべての資料を消耗品と見なすことは出来ないし、紙に書かれ印刷された伝統的資料にこそ意味があると言う、保守的な意見さえも出ている。
とにかく、すべての資料を網羅的・総花的に購入することは不可能であり、不適当でもある。具体的方策としては、各図書館がそれぞれの得意分野を明確化し重点的に収集、他の図書館と分担収集をはかるやり方がある。この場合、所在情報の整備が不可欠であり、人手もお金もかかる。また現実的には、自他図書館相互に収集分野の切り分けがうまくゆくかどうか難しいところである。もうひとつ、単独の図書館で普遍的・基幹的収集分野と、流動的・現状対応的収集分野とを考える方向がある。変わらない価値を求め、長期にわたって学問に貢献し、大学や地域の財産となるような集書の柱をしっかりと立てる一方、時代の変化に対応する資料収集にも目配りするが、両者のバランスをとることは誠に難しい。本学図書館では、日本文学を軸に、医学・歯学・絵本・洋書等の古典籍を普遍的・基幹的収集分野とし、かなりの評価を得ている。
（学術情報基盤の今後の在り方）
図書館は「大学本来の目的である高等教育と学術研究活動を支える重要な学術情報基盤」（以下、

「　」は文部科学省報告「学術情報基盤の今後の在り方」よりの引用）であり、その意義と価値は今後ますます増大するであろう。図書予算の確保は勿論、図書館全般の円滑運営のためには、まず大学当局に図書館の意義と価値とを認識してもらわなくてはならず、普段のアピールが大切である。その前に、たとえば「人文・社会科学の分野においては、図書等の文献・資料は、自然科学分野における実験装置と同等の役割」を持つこと、「各大学の特色を活かした資料の体系的な収書と保存に努める」責任があること、「大学図書館が大学の情報戦略について指導権を発揮」しうる企画力・提案力が不可欠であること等を、図書館自らが深く理解しなくてはならない。

本学図書館の場合、少ない負担で効果の高い新規事業を考え、図書館も大学経営に十分貢献出来る戦略を打ち出している。ただし、あくまでも教育研究活動支援の充実が大前提であり、学生・教員へのサービスを第一義とする。具体的には、大学院生による学習アドバイザー制度、ＡＯ入試等学生募集対策への協力、経済界や地方都市の首長に寄稿依頼した館報による宣伝活動の強化、諸学会と連携した展示、公開講座にあたって専門家の資料解説を行う市民への学術サービス提供、一次資料を整備し大学院生の業績作りを支援、自治体議員団の招聘、図書館独自の国際交流等を提案、実施した。

（３）質疑応答と意見

Ｑ：「学生募集対策（ＡＯ入試等）への協力」と「図書館独自の国際交流」について、具体的にうかがいたい。

Ａ：ＡＯ入試の課題作成にあたって、図書館を利用すると有効であるような問題を織り込んでもらい、面談時に教員が図書館で具体的な資料を用いて受験生を指導する。ＡＯ入試が有効に機能することは勿論、入学前教育の一環としても大いに意味があると思われる。ただし、学内の教育・研究の支援に差し支えないよう、十分な配慮が必要となる。

また、国際交流に関しては、外国のトップ大学はなかなか日本の小規模大学に眼を向けてくれないので、長期的展望のもとに特色ある蔵書を形成し、先方の注意を喚起した。

Ｑ：図書予算を共通経費化して集中管理すると、学部の教員との密接な関係が離れ、学部にふさわしい収書が困難になるのではないか。

Ａ：共通経費化しても教員の協力なしには優れた収書は不可能であろう。一般に大学の基盤は各学部であるから、どのような状況であっても、学部とのしっかりしたパイプを確保する必要がある。

※名目上は学部縦割りだが、補正予算検討時に学部間の壁を取り除き、予算の不足する学部に振り分けることを計画している。共通経費化に近い効果があるのではないか。

Ｑ：前任の大学では、教員が研究費で購入した図書をすべて返却するので、同一図書が大量に集まり事務局が困る事と聞いた。現任の大学では少額のものは返却しなくてよいことになっていて、この点は緩和されているが、教員の研究費を削った場合、図書館へ教員個人研究図書購入希望が増え、教育に無関係な図書が多くなって、研究支援と教育とが矛盾するのではないか。そのバランスをどう考えるか。

Ａ：個人研究費を削減すると、確かにそのような問題が起こりうる。研究と教育のバランスへの対応としては、本学図書館の現実を言えば、各学部の代表者を集めて合議し、図書予算全体の中から普遍的に教育上必要な書籍購入額を確保している。専門的教育に関わる部分は、各学科単位の会議で決定するシステムであり、基本的に教育優先の収書を行う。

Ｑ：古典籍購入のための特別予算は毎年計上しているか。

Ａ：本学のような小規模大学では、古典籍購入のための特別予算は一切期待できない。従って長期的な収書戦略を立てることと、他の機関が見落とすような低価格の書物の中から価値ある資料を選び出す能力の養成とで勝負している。当然、教員・図書館の協力関係、あるいは書店との信頼関係が欠かせない。古典籍は、洋書・医学書も集めるが、中心は日本文学関連の資料である。

Ｑ：３年前にすべての予算一律２５％カットと言う政策が示された。それまで図書予算は聖域であり、前年度実績しか予算申請根拠がなかったので、カット以前に復するために新たな根拠づけが必要となり、学生への還元率として授業料の１％、理工学部で３％を図書予算として計上した。後付の理屈ではあるが、カット以前の金額に見合う額となった。他大学では、図書予算の算定基準をどのように考えているか。

Ａ：本学では特に理論的数値を考えてこなかったので、他校のご意見を伺いたい。

※大学総予算に占める図書予算の比率は全国平均１．４％と言う報告がある。

※前任校と現任校の図書予算を比較すると、１０分の１である。学生に対する教育にも、教員の研究ニーズにもほとんど対応出来ていない。私立大学間の格差は非常に大きく、現任校の場合図書費の増額に努力しており、学生の学習活動を支援する図書館機能は年々充実しているが、その分研究資料整備面で立ち後れ、教員から不満が出ている。
Ｑ：海外定期刊行物の値上がりについて、年々１０％の値上がりが図書予算影響していることへの対策を、特に自然科学系図書館に伺いたい。
※私立大学図書館コンソーシアムを設立し、電子ジャーナルの共同価格交渉をした。最近は公立大学も参加し、公私立大学図書館コンソーシアムで外国の出版元との価格交渉・条件交渉をしている。私立１３９校、公立１０校の参加があり、より多くの大学が参加して出来るだけ低価格で導入出来ればと考える。最近、国立情報学研究所・国立大学図書館協会・公私立大学図書館コンソーシアムの３者で、Ｓｐｒｉｎｇｅｒ、ＯＵＰなどの電子ジャーナルを創刊号から利用出来るようにと言う目的で、それなりの出費をしている。もっとたくさんの大学が参加すれば、大きな力となれる。
（テーマ外の質問）
Ｑ：一次資料は１点しかないので、それを所蔵する図書館はライブラリーであると同時にアーカイブズとしての機能を求められる。１点しかない資料の管理方法・サービスの仕方・それに携わる図書館員の教育方法について知りたい。
Ａ：一般書と一次資料すなわち貴重書とでは、保管・利用いずれの面でも大きく異なる。貴重書は２４時間温度湿度管理の貴重書庫に収め、厳重に保管されている。閲覧資格や閲覧場所、閲覧時間も相当制限されるのはやむを得ないことである。しかし大学のお宝としてしまい込み、内部の教員すら利用できない図書館もあると側聞するが、それでは意味がない。物理的に十分な保管施設・閲覧場所等を整備し、任に堪える職員を養成して、一次資料に相応しい利用システムを作り上げなくてはならない。本学では、古典籍専門の係を置き、書庫管理・出納は勿論、受け入れ時の蔵書印の押し方にまで配慮できる職員を配する。具体的には、先輩司書からの指導・外部機関の見学・古書展での実地研修・古典籍に詳しい教員による講習等の訓練である。なにかわからないことがあったら、すぐに専門の教員にアドバイスが求められる協力態勢が大切であろう。なお、古典籍のネット上への解放やＣＤ－ＲＯＭ化も一次資料を痛めない利用法としては有効だが、それらが整備されているからと言って、原本の閲覧をむやみに制限されるのは困る。電子媒体が研究者に対して垣根とならないことを、この際希望しておきたい。
※古典籍すべての所蔵データベースを作成し利用出来る。そのうち３分の１くらいはＧｏｏｇｌｅから無料で画像検索可能である。２００５年度から５カ年計画を実施し、昨年１２月には洋学関係のものが一般公開され、今年度は国文学関係のものが利用できる予定である。

この他に、事務組織再編に関し図書館からメディアセンターに移行した過程について質問があり、複数館から話題提供がなされた。

最後に、議長から鶴見大学図書館長として参考資料の紹介があり、会を閉じた。